

# 湖東三山

## 西明寺・金剛輪寺・百済寺



滋賀県教育委員会

### 西明寺には

交通：電車の場合  
西明寺にはJR彦根駅より、タクシー利用20分

マイカーの場合  
名神高速道路彦根ICまたは、八日市ICから国道307号へ。

### 金剛輪寺には

交通：電車の場合  
JR稲枝駅より、彦根観光バス「金剛輪寺」下車。(土・日・祝運休)  
JR稲枝駅よりタクシー利用。約15分

マイカーの場合  
名神高速道路八日市ICまたは、彦根ICから国道307号へ。

### 百済寺には

交通：電車の場合  
JR近江八幡駅下車、近江鉄道に乗り換え、八日市駅下車、タクシー利用。約15分

マイカーの場合  
名神高速道路八日市ICまたは、彦根ICから国道307号へ

国土地理院発行の5万分の1地形図「彦根東部」・「御在所山」を下図に使用



埋蔵文化財活用ブックレット1 (近江の山寺1)

湖東三山 西明寺・金剛輪寺・百済寺

刊 行：平成22年11月1日

編 集：滋賀県教育委員会・東近江市教育委員会・愛荘町立歴史文化博物館

制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課

住 所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号

電 話：077(528)4674 FAX:077(528)4956 e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp

印 刷：共栄印刷株式会社

# 目次

I 湖東三山	1
II 西明寺	2
III 金剛輪寺	10
1. 天台宗金剛輪寺—文化財の宝庫—	10
2. 山寺が山城に—寺坊の城郭化—	11
3. 金剛輪寺遺跡	14
《コラム1》 金剛輪寺明壽院庭園	16
《コラム2》 水雲閣と赤報隊	19
IV 百濟寺	20
1. 天台宗百濟寺	20
2. 百濟寺の変遷	24

本埋蔵文化財活用ブックレットは、東近江市教育委員会と愛荘町立歴史文化博物館、滋賀県教育委員会が協働して原稿を作成し、滋賀県教育委員会が国庫補助金（埋蔵文化財保存活用整備事業）を受けて刊行した。

表紙の写真 西明寺三重塔 金剛輪寺石造宝塔 百濟寺本坊庭園

## I 湖東三山

鈴鹿山麓に営まれた西明寺・金剛輪寺・百濟寺の三つの天台寺院を総称して、湖東三山と呼びます。開基も本尊も異なる寺院を総称するようになった背景には、紅葉の名所という観光的な要素が強いといえます。

しかし、古代に遡る長い歴史を持ち、中世期に栄え、焼打ち、そして復興。三つの寺院を文化資産として見比べれば、寺院・信仰が人々の歴史の中に果たした役割が浮かび上がります。こうした意味から、湖東三山をもう一度見直すことには意義があると考えます。



西明寺境内

金剛輪寺境内



百濟寺境内



## II <sup>さいみょうじ</sup>西明寺

湖東三山の最も北にあたる犬上郡甲良町池寺に所在します。多くの文化財を有することで知られた、湖東の名刹の一つです。

寺伝によれば、平安時代の初め、三修上人が薬師如来の姿が浮かび上がった池の畔の立木に、像を刻んだのが始まりとされます。

寺は、この開基伝承にも見られるように、雨乞いや水への信仰と結びついていました。「八大竜王」の旗を持って山で雨乞いをする行事が、戦後もしばらく続けられていました。山号は「龍応山」、近江水の宝にも選定されています。



県指定文化財木造十二神将立像のうち、寅神（迷企羅大将）

西明寺本堂では、薬師如来の厨子を守るように十二神将立像が配されています。写真は寅年を守る迷企羅大将です。



国宝西明寺三重塔

鎌倉時代後期頃に建てられた三重塔は、伝統的な和様の意匠でまとめられ、遞減率が大きく安定感のある建築美は三重塔のなかでも屈指のものであります。初重中央に大日如来をまつり、四天柱の金剛界三十二菩薩、四方壁の法華経二十八品の要文と解説画など、精美な壁画が描かれています。

国道307号から参道を登る最初の見所は、「フダンザクラ」滋賀県指定の天然記念物です。2本が並んでおり、秋から冬にかけて、ソメイヨシノに比べてやや小振りで、白色の濃い花を開花させます。変わりサクラの一種で、紅葉の季節に咲き出すサクラは、西明寺のシンボルとも言えます。2本並んだ木のうち、正面左側の古木は樹齢250年以上とも言われています。

なお、境内にはこの2本以外にも、他に5本のフダンザクラがあります。探して歩くのも一興でしょう。

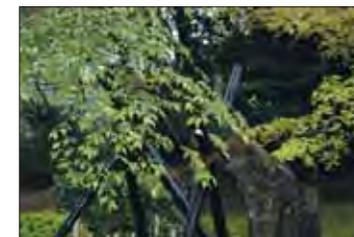


滋賀県指定天然記念物西明寺のフダンザクラ  
古木と若木が並んで植えられています。



フダンザクラの花

ソメイヨシノより小振りで、白味が強い。紅葉の中に清楚に咲く花は、西明寺の見所の一つです。



フダンザクラの古木

樹齢250年と言われる。サクラとしては異例の古木で、長い風雪に耐えてきた貫禄が漂います。根に負担をかけないためにも、柵の近くは立入禁止となっています。

残念ながら、西明寺の境内は名神高速道路によって分断されています。しかし、石積みや植栽がなされ、高速道路を横断しているとは気が付かない程です。絶妙の新旧の対比を楽しみつつ、進んでいきましょう。



高速道路を越えれば、いよいよ、古刹の雰囲気漂う参道です。石段と石垣・石畳が続き、水信仰との関わりを示すように側溝には湧き水が流れています。石垣や木陰に青々と苔が育つ様は、西明寺の魅力の一つでもあります。

これらの石垣などは、信長による焼き討ち以降の江戸時代初期に整備されたと考えられていますが、一部には中世に遡るような石組みを見ることができます。杉の大木や野鳥の声を楽しみつつ、次第に急になる石段をゆっくりと歩いて行きましょう。

参道の両側には、石垣や石畳に区画された平坦面が続き、かつては、



石垣に挟まれた参道

名神高速道路を越えれば、緩やかな登り道が続く。夏には新緑のトンネルとなり、別世界の静かさが広がります。



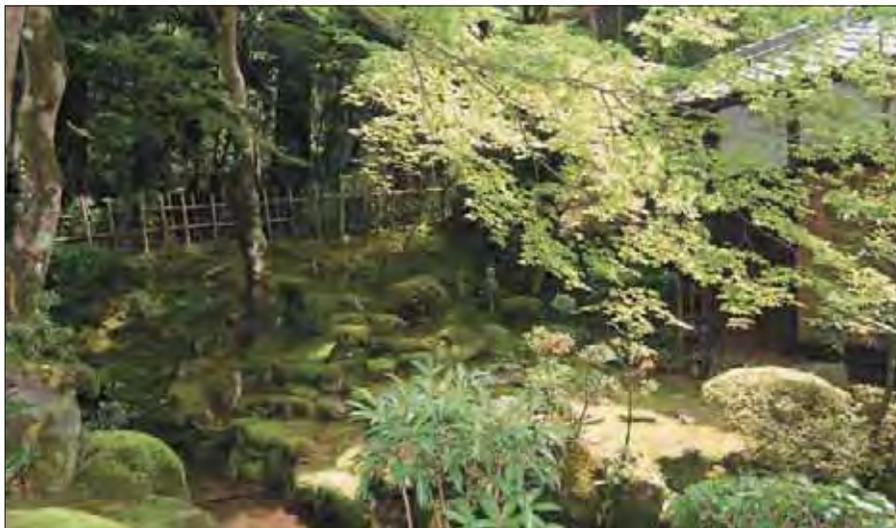
西明寺の見所の一つは苔。参道の側溝に沿って、見事な苔が育っています。



本坊横の高石垣

西明寺の格式の高さを示すかのように聳え立っています。

多くの坊や子院が並んでいた様子を伝えています。丁寧に見てゆけば、景石や池の護岸と思われる石組みが見られ、かつて庭園が営まれていた様子を目にすることができます。また、古井戸が残っている場所や石仏・五輪塔が集められた場所もあります。「観正坊」は今も建物が残り、その前庭となる庭園も見所です。詳細な調査はなされていませんが、本坊庭園にも通じる景石の使い方が見所です。



観正坊前の庭園

自然の傾斜を築山に見立て、比較的小型の景石を巧みに配置する。池の護岸石組みも心地よく、本来の姿を彷彿とさせます。



平坦面に忘れさられたかのように残る景石。本来、かなりの数の坊が庭園を備えていたと考えられ、優れた庭園群が西明寺の特徴の一つとも考えられます。



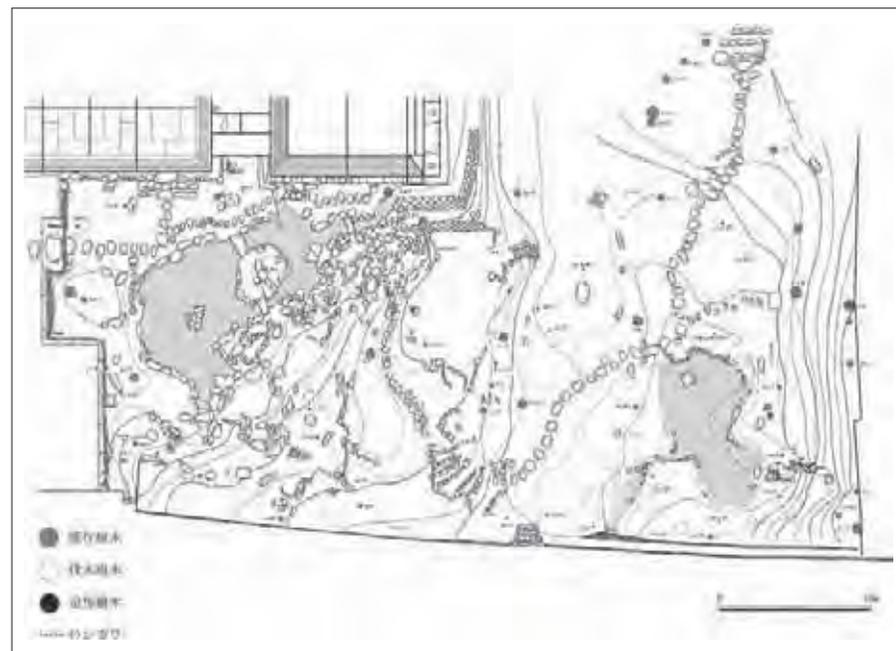
本来庭園であったと考えられる場所に、五輪塔などの石仏が集められています。

ひときわ高い石垣の上には本坊（旧本覚院）が営まれています。本坊前も、植え込みが整備され、景石なども置かれた、気持ちの良い空間です。

門をくぐれば、名勝の西明寺本坊庭園です。元和元年（1615）から開始された西明寺の本格的な復興に尽力した、甲賀の望月有閑が自ら指図したと伝えられる名園です。蓬莱庭とも呼ばれ、立石は本尊の薬師如来や諸仏をお迎えする菩薩を表し、刈込は瑞雲を表現したと言われています。

枯滝の横から中段に登れば、中世の石塔が目を引き、また、異なった趣を見せます。

上段の庭は、水害で埋没してものを、平成21年度に復元、整備したものです。失われた景石も多いようですが、復元された苔庭が美しい。下段の池庭に注目集まりがちですが、上段までの緩やかながらも劇的な変化を見せる一連の庭を楽しむことが肝心です。



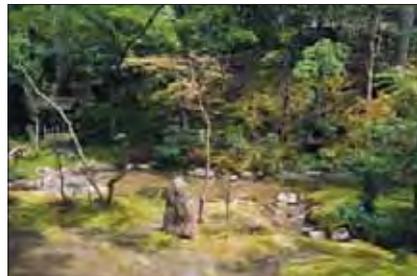
名勝西明寺本坊庭園 測量図



蓬萊庭とも呼ばれる、名勝庭園の下段部分。景石と刈込が絶妙のバランスを示します。発掘調査では、池の底打ちなど非常に丁寧な作庭技術も明らかになっています。



庭園中段に景として置かれた石製宝塔  
中世のものである可能性が高い。



庭園上段部分

水害で埋没していた池が掘り直されました。伸びやかに広がる池は決して深くはありませんが、護岸が美しく、蓬萊庭とも異なる趣があります。



本坊前の植込み

名勝庭園を過ぎれば、本堂地区は眼前です。

本堂は鎌倉時代前期頃に建立され、その後幾度か改修が加えられました。緩い勾配の檜皮屋根の優れた構成美を持つ国宝建物です。これと対峙する国宝三重塔は鎌倉時代後期頃の建立とされ、整美な外見と華やかな内装を持ちます。重要文化財の二天門を含めて、バランスに優れた建物群の全体像を楽しめます。

本堂内部では、秘仏となっている薬師如来立像（重要文化財）を中心に、日光・月光菩薩像や十二神将像など、多くの仏像を拝観できます。

本堂の裏に存在する「阿伽池」は、西明寺の信仰の本質に係わる見所の一つです。

三重塔から裏に登れば、重要文化財の石製宝塔が存在します。



重要文化財西明寺宝塔

嘉元二年（1304）十二月の銘があります。



国宝西明寺本堂

本堂は鎌倉時代前期頃に五間堂として建築されましたが、室町時代前期頃に周囲一間ずつ拡張し、向拝を付加して七間堂となりました。巧妙な改造の技とともに伝統的な和様の意匠でまとめられた優美な姿は、日本建築の最高傑作の一つと言っても過言ではありません。



重要文化財西明寺二天門

建物の巻斗の墨書から応永十四年（1407）に建築されたことがわかります。全体に和様ですが、柱下の礎盤や、頭貫先の線形つきの木鼻などに禅宗様を見ることができます。

## 1. 天台宗金剛輪寺 - 文化財の宝庫 -

愛知郡愛荘町には古墳群や中世城郭のほか、中山道「愛知川宿」など数多くの歴史文化遺産があります。なかでも天台宗の古刹金剛輪寺は、8世紀前半頃に聖武天皇の勅願により行基が開山したといわれています。同寺は嘉祥年間（848～851）に最澄の弟子である慈覚大師（円仁）によって中興され、天台寺院として鎌倉時代に隆盛を極めました。このことは、弘安11年（1288）に近江の守護である佐々木頼綱によって再興・寄進されたと伝えられる本堂（大悲閣）に当代の重要な遺品が多く集中することからもうかがえます。

現在、金剛輪寺には国宝の本堂をはじめ、名勝、彫刻、工芸品や聖教類など、多種多様な文化財が伝えられており、このことが「文化財の宝庫」と呼ばれる所以となっています。



金剛輪寺本堂「大悲閣」(国宝)

桁行7間・梁間7間の檜皮葺入母屋造。正面は部戸を用います。全体的には和様の建築様式に造られ、内陣の一部には拳鼻が使用されています。須弥壇金具銘によれば弘安11年（1288）建立とされますが、唐様の建築様式から室町時代初期に大きな手が加えられたものと考えられます。



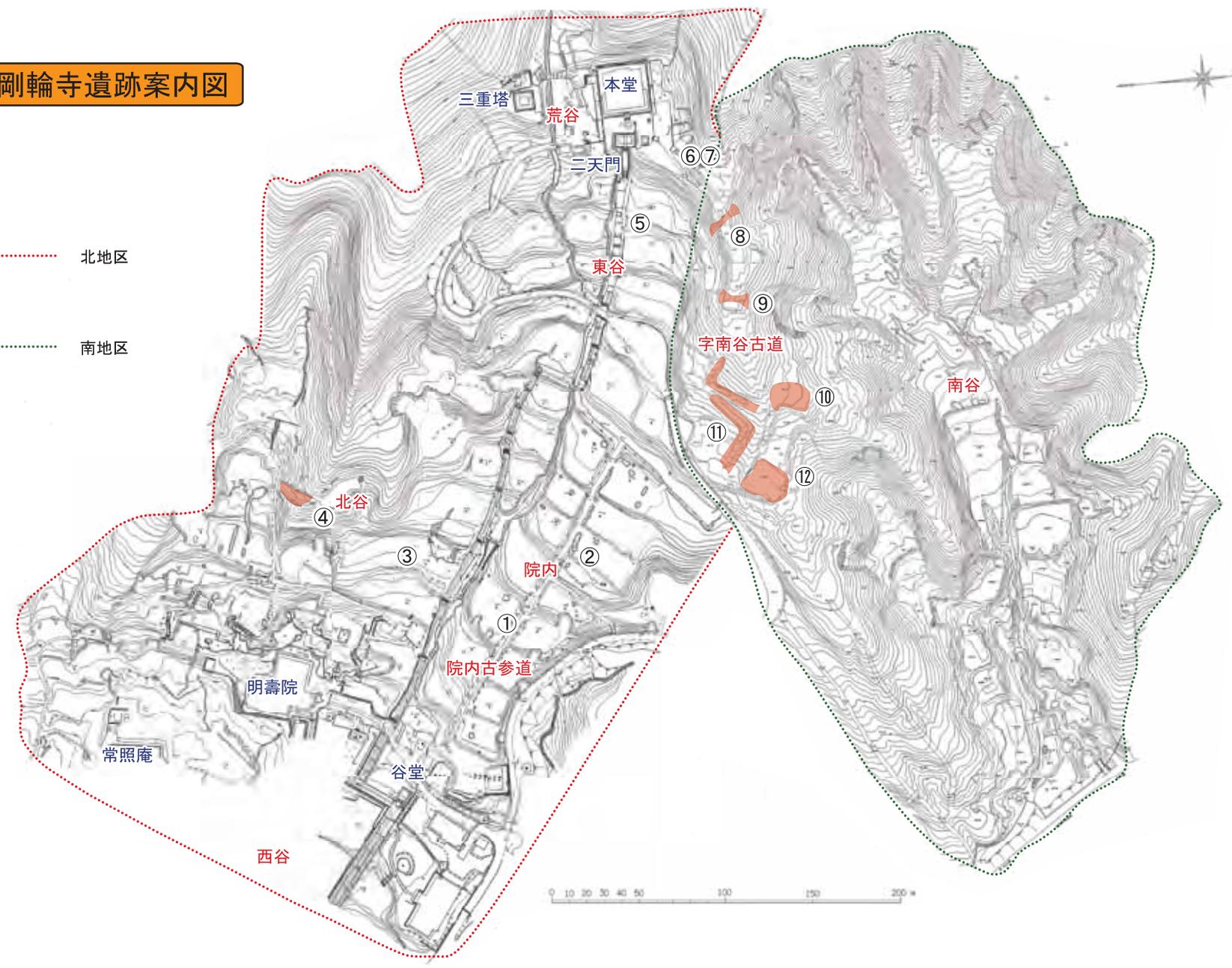
金剛輪寺三重塔（重要文化財）

## 2. 山寺が山城に - 寺坊の城郭化 -

近江では中世になって「山寺」が城塞化されていく事例が多く知られています。特に湖東三山のなかでも金剛輪寺や百済寺については、かねてより城郭遺構の存在が指摘されていました。近年実施された金剛輪寺遺跡の詳細分布調査では、山城の遺構が多数確認されています。

# 金剛輪寺遺跡案内図

- ..... 北地区
- ..... 南地区



### 3. 金剛輪寺遺跡

#### ア. 北地区



##### ① 院内古参道

古参道の両側には金剛輪寺のなかでも最も保存状態が良い段築平場が広がっています（写真は西より本堂の方角を望む）。



##### ② 石造阿弥陀如来坐像

花崗岩の一石に阿弥陀坐像を半肉彫し、蓮華座は線刻で表現しています。さらに像の左右には観音種子サ、勢至種子サクを刻み、全体で阿弥陀三尊を構成しています。



##### ③ 石造阿弥陀如来坐像

本像は大きな花崗岩を舟形に成形し、定印を結んだ阿弥陀如来像を厚肉彫で彫出され、別石で造った反花座上に据えられています。端正な相好や髪際中央がゆるやかにカーブを描く点、そして入念に刻まれた衣文線などから、鎌倉時代後期の制作と考えられます。また、光背外縁部の厚みを残し、像の輪郭に向かって内側に深く彫りこむことにより、磨崖仏のように像の立体化を図っていることがうかがえます。



##### ④ 北谷の堀切

明壽院庭園東側に設けられた堀切。その存在は古くから知られており、金剛輪寺の城塞化を語るうえで重要な遺構といえます。



##### ⑤ 東谷の石垣

一部において横目地が通るものの、未加工の石が多く使用されていることから、中世の山寺に石垣が普及、展開した時期に築かれたものといわれています。



##### ⑥ 石造地藏菩薩坐像

舟形状に加工した一石の表面に、錫杖と宝珠を執る地藏坐像を浮彫で表現しています。二重円相光背を線刻し、蓮華座の下に格狭間入りの基壇をあらわすのが特徴です。



##### ⑦ 石造宝塔

鎌倉後期の宝塔。基礎は、ほぼ同寸の四石を「田の字」状に組み、各面を二区に分けてそれぞれ格狭間を造ります。塔身には軸部四方に鳥居が彫出されています。

## 《コラム1》金剛輪寺明壽院庭園

金剛輪寺の本坊にあたる明壽院には、本坊書院を囲むように三つの池庭が連続しており、南庭は桃山時代、主庭をなす東庭は江戸時代初期、奥の北庭は江戸時代末期の作と推定されています。

明壽院総門、白門をくぐると書院の南側にあたる場所に南庭があります。小庭ですが、三個の自然石の板石を連ねた石橋を架け、渡ったところには鎌倉末期の宝篋印塔があります。

南庭に続く東庭は、中心庭園にふさわしい広い面積を有しています。背景をなす山腹が出島風に中央に張り出し、その左右に現在は枯瀧となっている形式を違えた2つの瀧があります。

東庭と細い水路でつながる北庭には石橋や岩舟が配され随所に作庭の工夫が施された庭であるといえます。

明壽院庭園は、一区画の平面的な位置にありながら、書院に沿って南・東・北の各庭にわかれ、しかも作庭の時期が若干異なっていることが特徴です。松尾山の自然を組み込んで造られた庭には多くの樹々が生息し新緑・紅葉の頃には庭園に彩りを添えてくれます。



明壽院庭園南庭

5月頃には石楠花が咲き乱れることから「石楠花の庭」とも呼ばれている。

## イ. 南地区



⑧・⑨字南谷古道堀切

本堂から郭外へと続く尾根筋（字南谷古道）に設けられた堀切（主郭へ向かう尾根筋や登城路に直交する空堀）。本堂側の堀切（写真上）には崩落防止のため、石を配しているのがわかります。



金剛輪寺の紫陽花

湖東三山は紅葉の名所として知られていますが、初夏の境内を七色に彩る紫陽花もまた、私たちの心を和ませてくれます。



本堂北面軒下出土の常滑甕

おそらく、谷水を溜めるための水甕として利用されていたと考えられます。（13世紀末から14世紀初頭に比定）



南地区平場 1  
字南谷古道沿いに形成された  
平場。(区画された平坦面)

空堀  
字南谷古道の北側に掘られた  
平面「L字」形の二重空堀。



南地区平場 2  
字南谷古道沿いに形成された  
平場。北東・南東の尾根を削り  
残し、土塁としています。南に  
は平入り虎口(入口)が確認で  
きます(写真は字南谷古道 東  
より土塁・平場を望む)。

## 《コラム2》<sup>すいうんかく</sup>水雲閣<sup>せきほうたい</sup>と赤報隊

明壽院庭園の東庭少し高台になったところに茶室水雲閣があります。水雲閣は天保年間(1830 ~ 44)に建立された二畳台目の茶室で、待合の格天井には四季の花々が描かれています。

この水雲閣で赤報隊の志士が密談したといわれ、現在も当時のままのおもかげを残しています。赤報隊は鳥羽・伏見の戦いで、幕府軍の敗北が明らかとなった慶応4年(明治元年・1868)正月10日金剛輪寺において公家の滋野井公寿と綾小路俊実を擁し結成されました。拳兵には脱藩士・農商民・神官・僧など、いわゆる草奔の志士が多くいました。

金剛輪寺が拳兵の場所選ばれたのは滋野井の側近で、京都の門跡寺院曼殊院の家人である山本太宰が、曼殊院の末寺である金剛輪寺に照会して手配したものです。湖東三山の名刹金剛輪寺は、歴史的にも朝廷と深いつながりのある寺で、かつ湖東の平野部と関ヶ原の出口を望む、戦略的要地に立地しているという、公卿を擁した拳兵の場にふさわしいシンボリックな存在であったといえます。

檜皮葺の美しい屋根と庭の植え込みなどの調和がみごとな水雲閣をみると往時の志士の想いが偲ばれます。



同内部



茶室 水雲閣



同天井

## IV ひやくさいじ 百濟寺

### 1. 天台宗百濟寺



仁王門から本堂を望む

百濟寺は、東近江市のほぼ中央、やや北よりに位置する、湖東三山として有名な天台宗の古刹です。聖徳太子の開基と伝えられ、高句麗僧恵慈と百濟僧道欣どうきんが関わったとされます。その後、平安時代末には天台寺院としてその地位を確立していたことが、文献資料等からわかります。

鎌倉・室町時代には隆盛を誇り、都にもその名が轟く湖東の大寺院として知れ渡ります。このころ世は戦乱に巻き込まれ、百濟寺とて例外ではありませんでした。しかし、百濟寺は近江守護佐々木六角氏の支援を得て、その防備を固めていきました。

その頃、近江に登場したのが織田信長です。信長は近江侵攻の当初、百濟寺を保護しました。しかし、百濟寺が佐々木六角と内通していることが明らかになると、全山焼き払ってしまいます。その様は、当時日本に滞在していたキリスト教宣教師ルイス・フロイスによりつづさに語られています。

全山灰燼に帰ってしまった百濟寺は、近世に至り、徳川幕府や譜代大名井伊家の支援をうけて復興します。しかし、往時の繁栄を取り戻すことは出来ず、本堂を中心とした範囲に限られたものとなりました。

その後近代を経て、昭和に入ると本坊喜見院を仁王門横から現在の場所に移築し、併せて山中大萩より不動堂どうどうも移築して、現本坊が整備されました。本坊書院の庭園は、現代鈍穴流どんけつりゅうの作法で作庭されています。こうして百濟寺は、幾多の苦難を乗り越えながら、現在に至るまで、その法灯を絶え間なく守り続けておられるのです。

この様に連綿と受け継がれてきたその歴史性と、それを証明する境内に良好に保存された中世最盛期の遺構が評価され、百濟寺は平成20年に史跡の指定、平成21年に東近江市名勝の指定を受けました。

ここでは、現代の百濟寺から時代を遡りながら、信長の焼き討ちの後近世に復興された姿、そして中世に最盛期を迎えていた頃の様子を見ていくことにしましょう。

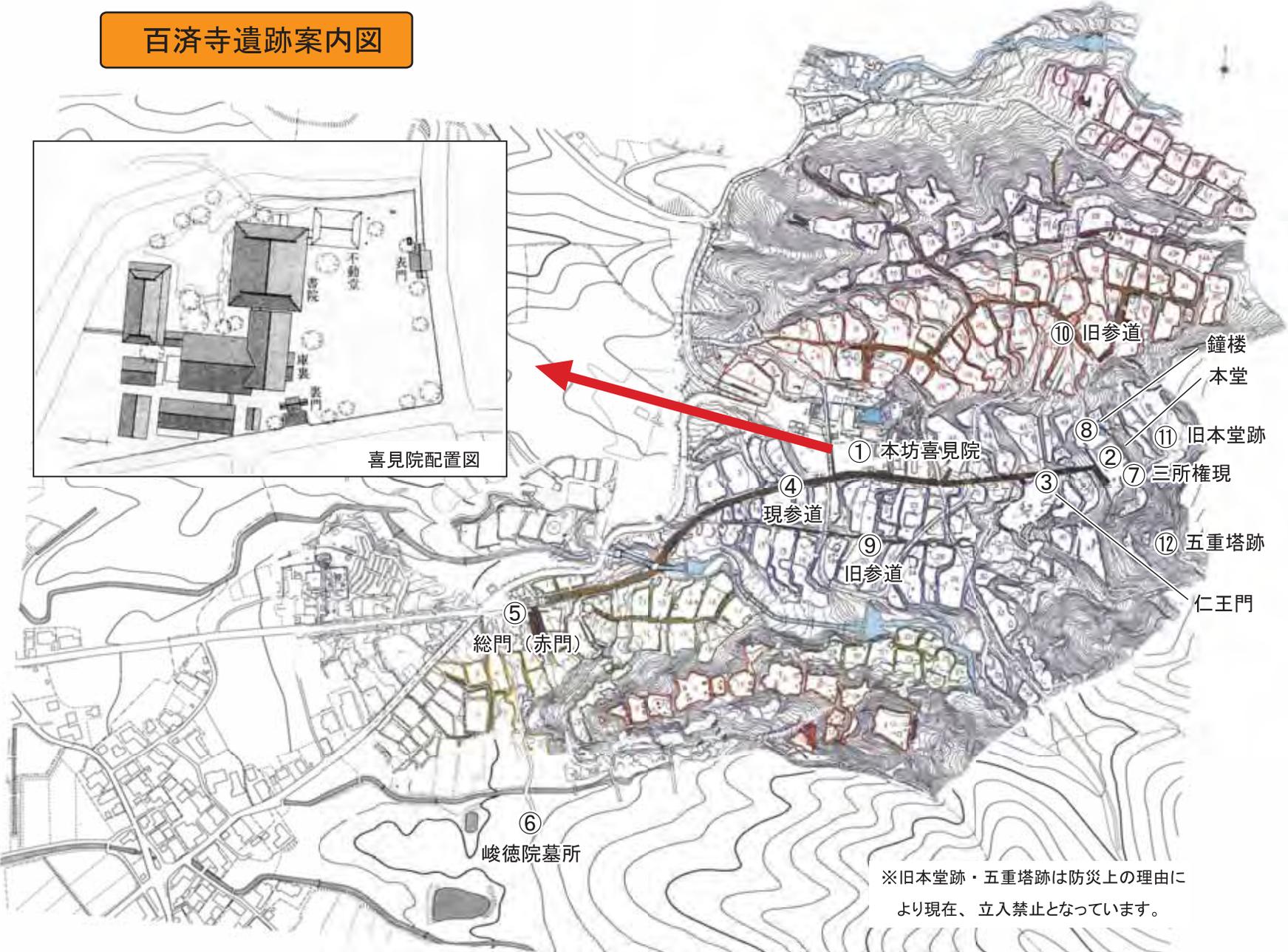


庭園展望台から湖東平野を望む

百濟寺遺跡案内図



喜見院配置図



※旧本堂跡・五重塔跡は防災上の理由により現在、立入禁止となっています。

## 2 百済寺の変遷

### ア．現在の百済寺

百済寺に参拝すると、駐車場からまず目にする建物が本坊喜見院<sup>きけんいん</sup>です。本坊喜見院は、昭和 15 年（1940）に仁王門南側から現在の位置に移築され、併せて山中にあった不動堂も移築されました。

庭園は、本坊整備後の昭和 39 年（1964）に着工し、昭和 43 年（1968）に完成しました。現代鈍穴流<sup>どんけつ</sup>の作法で作庭された庭園です。

本坊喜見院（書院 登録有形文化財・不動堂・庭園）



書院（登録有形文化財）



書院と庭園



不動堂

### イ．近世の百済寺

百済寺は最盛期を誇っていた中世末に、織田信長により全山灰燼と歸します。近世には、南光坊天海の高弟亮算<sup>りょうさん</sup>が入山し、徳川幕府をはじめ、譜代筆頭大名井伊家などの支援をうけ復興します。しかし、往時の繁栄を取り戻すことは出来ませんでした。現在の参道をはじめ、これに面した主だった建物は、この時に復興されたものです。

本堂（重要文化財）



いわゆる五間堂で、信長の焼き討ちの後、慶安三年（1650）に再建されたものです。

仁王門



現参道から見上げる大草鞋が印象的な仁王門は、現参道や本堂と同時期に再建され、近代に大規模な改修を受けました。

④ 現参道



中世の石垣を利用して近世に整備されたことが石垣よりわかります。現参道沿いに何箇所か石垣の構築の過程を見て取れる部分が残っています。

⑤ 総門（赤門）（市指定文化財）



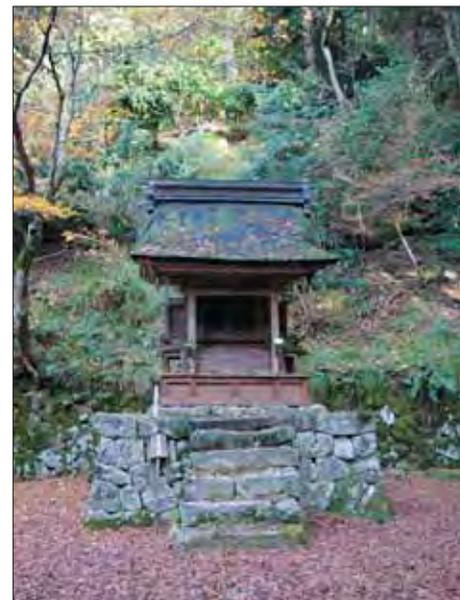
本堂再建の頃に建立されたと考えられます。門の両脇には石塁及び堀切があり、大寺の正門としての堅固な構えとなっています。

⑥ 峻徳院墓所 しゅんとくいん



彦根藩主井伊家二代直孝の嫡子であった直滋は、二代・三代将軍に寵愛されましたが、父直孝の勘気にふれ、出家した後、寛文元年（1661）この地で没しました。享保17年（1732）に井伊家九代直惟より許しを得てこの地に廟が設けられました。

⑦ 三所権現（市指定文化財）



本堂と同時期に建立された一間社流造の社殿。本堂内陣で保存されていた懸仏及び当社殿に祀られていた御正体（鏡板）より信長の焼き討ちの際に本尊を奥の院に避難し、その後仮堂を建てて復興していった様子が明らかになりました。

### 鐘楼（市指定文化財）



三所権現と同じく、本堂とほぼ同時期に建立された建物です。

### 旧本堂跡

かつて「湖東の小叡山」と称された大寺院百済寺の本堂があった場所です。現在より規模の大きな七間四面の本堂であったとされています。現在の本堂のある平地



地より三倍近い広さの平坦地には、一部礎石の見える部分もあり、本堂以外にもいくつかの建物が配置されていたことが推測されます。

### ウ．中世の百済寺

#### ・ 旧参道

前述の通り、現在の総門から本坊を経て本堂に至る石段の参道は近世に復興整備されたものですが、中世に利用されていた旧参道も、現在の参道より一歩足を踏み入れれば、その様子を窺えます。は現参道に平行した直線部分で、

は本堂から北側に下る林道沿いにあります。旧参道から堂・坊跡の平坦地に入る石段や周囲を取り囲む石垣を見ることが出来ます。



写真は

### 五重塔跡

中世百済寺を象徴するもう一つの建物が五重塔です。百済寺の発掘は、昭和27年に五重塔跡で信楽焼の一つの壺が発見されたことから始まりました。少なくとも室町期には五重塔がこの地に立っており、



度重なる火災によって二回以上焼失したことが、文献からも発掘調査からも明らかになっています。